大学が考える 学生の資格取得

塩川茂樹

Shigeki Shiokawa

神奈川工科大学

長谷部正孝

Masataka Hasebe

神奈川工科大学

1 はじめに

学生に「資格は必要か?」という質問をすると、「必要ない」と回答する人はほとんどいないであろう。では「なぜ資格は必要か?」と問われたらどうだろうか。はっきりとした回答を持っていない人もいるであろうし、持っていたとしても、様々な回答が挙がることだろう。

それでは大学は「学生に資格は必要」と考えているのだろうか。やはり「必要ない」と答える大学はほとんどないはずである。ただし、資格を取ることの意義については、学生の考えと少し違うところがあるかもしれない。そこで、学生の資格取得を大学がどのように考えているかについて、神奈川工科大学の事例を交えながら解説する。

2 学生にとっての資格

まず初めに、本学学生の一部に「資格は必要か?」と聞いてみたところ、全員が「資格は必要」と答えた。その理由は「将来役に立つ」「就職に有利」「履歴書に書ける」「自信につながる」「知識が増える」「持っているに越したことはない」「何となく」など、様々である。ただし、どんな資格が必要かと尋ねると、「運転免許」という回答が多く挙がった。

このように、ある行為のために取得が法律で定められている「免許」も、学生には資格の一つのとして受け取られている。実際に本学でも学科によっては、「管理栄養士」や「看護師」など、特定の職業に就くための免許取得を前提とした教育を行っているところがある。本稿では、このようないわゆる免許については扱う対象から外し、例えば「英検*級」のように取得が義務付けられてはいない「資格」について考えてみる。

3 大学の教育課程と資格

大学には、卒業認定や学位授与についての方針を指すディプロマポリシーと、ディプロマポリシーや教育目標に基づいた教育課程編成についての方針を指すカリキュラムポリシーが存在する。そして、これらのディプロマポリシーとカリキュラムポリシーが、大学単位、学部単位、あるいは学科単位で明確に定められている。

例えば神奈川工科大学では、大学全体のディプロマポリシーとして、創造的思考力（創造力、課題解決力、行動力）、チームワーク（コミュニケーション力、社会的責任と倫理観）、基礎学力（専門分野の基礎的な知識・技能、職業人の素養としての基礎知識）を有することを掲げている。そしてカリキュラムポリシーでは、基礎力育成を重視した教育、共通基盤教育と専門教育、学力にあった教育、創造性を育む能動・体験型教育、得意分野を伸ばす個人指導の5項目を挙げている。それぞれのポリシーには具体的な説明が付け加えられている。更にこれらのポリシーは、学部・学科単位でより細かな内容で記されていく。しかしながら、これらのポリシーのどこにも資格という言葉は含まれていない。

では大学にとって資格は必要のないものなのだろうか。筆者らはそうは考えていない。表1は、本学情報学部（情報工学科、情報ネットワーク・コミュニケーション学科、情報メディア学科）の学生が取得することで、単位認定される資格の一覧である。2016年度には述べ360単位の認定が行われた。更に、単位認定されない一部の資格も含めて大学在学中に取得したものについては、その受験料を全額支援する制度も設けている。これらも含めて様々な制度が多く大学の大学で設けられている。つまり大学としては学生の資格取得を大いに推奨していると言える。では、その理由は何であろうか。

表 1 本学情報学部で単位認定される資格*

資格の分類	資格名称	認定科目 (単位数)
語学検定	英語技能検定 (TOEIC, TOEFL iBT 含む)	英語 (2: TOEIC400 以上, 4: 500 以上, 6: 650 以上)
	ドイツ語技能検定	ドイツ語 (2)
	フランス語技能検定	フランス語 (2)
	中国語技能検定	中国語 (2)
情報処理 技術者試験	基本情報技術者試験	基本情報技術者 (2)
	応用情報技術者試験	応用情報技術者 (2)
	情報セキュリティマネジメント試験	セキュリティ情報 技術者 (2)
	ITストラテジスト試験, システムアーキテクト試験, ネットワークスペシャリスト試験, データベーススペシャリスト試験, エンベデッドシステムスペシャリスト試験, ITサービスマネージャ試験, 情報処理安全確保支援士試験	高度情報技術者 (上限 2)
	C 言語プログラミング能力検定	C 言語 (上限 6)
	JAVA 言語プログラミング能力検定	JAVA 言語 (3)
CG-ARTS 検定	CGクリエイター検定, Webデザイナー検定, 画像処理エンジニア検定, マルチメディア検定, CGエンジニア検定	メディア技術者 (上限 2)
シスコ技術者 認定試験	Cisco Certified Entry Networking Technician (CCENT)	初級ネットワーク 技術者 (2)
	Cisco Certified Network Associate (CCNA)	応用ネットワーク 技術者 (2)
	Cisco Certified Network Professional (CCNP)	高度ネットワーク 技術者 (2)

* 2017 年度、重複取得による認定単位には上限が設けられている。学科によって認定されない資格もある。

図 1 資格とカリキュラムの関係

の大学生の学習時間、特に授業外学習の時間が非常に少ないことが問題としてよく挙げられる。その理由の一つに学習意欲の低さがあると考えられる。一方で資格取得は、①その達成基準が公平で明確であること、②達成したことを第三者に容易に示せること、から、学習に対する動機付けがしやすいという特徴がある。また、授業外学習の時間が増え日常的な学習習慣が身に付くこと、取得による達成感が更なる学習意欲の向上につながることも、なども期待できる。

上記の二つのほかにも様々な活用面があるが、いずれにしても、大学は学生の資格取得を大いに推奨していると言える。ただし先にも述べたとおり、資格取得をポリシーに挙げているわけではないため、正課として資格取得のための講義を開講するのではなく、様々な手段により支援をしているのである。

しかしながら、資格取得に対する単位認定や受験料支援は、根本的な資格取得支援にはなっていない。なぜならこれらは資格取得という成功に対する支援であり、そこに至る過程に対しての支援としては不十分なためである。先ほど述べた資格取得の第2の活用を考えると、資格を取得したいという学生の意欲を支えられる仕組みも必要である。そこで考えられるのが、正課外の学習プログラムである。次章では、本学での取り組み事例としてITエクステンションセンターについて紹介する。

4

大学の立場における学生の資格取得の意義

大学は、学生が資格を取得することを、二つの側面で活用していると、筆者らは考えている。第1に、基礎学力の一部を有していることの担保である。ディプロマポリシーで学部や学科がそれぞれ求めている基礎学力は、この資格とこの資格を取れば十分、というものではない。しかしながら、この部分の学力を有しているならこの資格は取得可能、ということは言えるかもしれない。例えば図1に示すように、資格Mを持っていることで、講義Aと演習Aを学修することによって身に付く学力があるとみなせる。したがって、そのような資格の取得に対して単位を認定することで、大学における同等の課程科目学修に当てる時間をほかの学修に役立てられるといった、履修の効率化が図られると期待している。

第2に、学生の学習意欲の喚起・向上である。日本

5

IT エクステンションセンターの資格取得支援

ITエクステンションセンターは、平成16年に現在の情報学部体制確立に併せて開設された。その大きな目的は、本学学生に対するIT技術者育成のサポートと、近隣市民へのIT技術教育の提供を通じた地域貢献である。今回紹介する資格取得プログラム講座だけでなく、幼児～小学生を対象とした教育プログラム「未来塾」など、様々なプログラムを提供している(図2)。

表2は2017年度に開講している（予定も含む）資格取得プログラム講座の一覧である。表からも分かるように、資格の中にはIT技術に余り関連のないものもある。これは講座の受講対象を情報学部学生に限らず、本学の全学生、更には近隣市民にも広げているためである。大学が資格を生涯学習のきっかけとして考えていることの一つの現れである。

学生は、キャンパス内にある本プログラムの受付を訪ねることから始める。そこでは専用のスタッフが個別相談を受け付けている。資格は取得したいと漠然と考えているものの、どの資格を取ればよいのか分からないという学生は多い。そこで「あなたにとって必要な資格は?」「どのような資格が就職に生かせるの?」など、講座が用意されていない資格も含めて、気軽に相談することが可能となっている。そして受講講座が決まると受講料を支払い講座が開始される。講座は年に複数回開催されるので、年間を通じてある程度好きなタイミングで受講することが可能である。また、受講料を支払わなければ受講できないが、同じ講座は原則として何回でも受講できるため、資格取得に失敗しても容易に再挑戦できる仕組みになっている。この点が、単位認定や受験料返還によ

る支援と異なり、資格取得のための過程の支援であると言える。2017年度にはこれまでに述べ80名の学生が本講座を利用している。

6 学科独自の資格取得支援の取組み

専門性の非常に高い資格については、学科単位で資格取得支援の仕組みを設ける方が高い効果を得られる場合もある。ここでは、本学情報学部における、二つの資格取得支援について紹介する。

(1) シスコ (CISCO) 技術者認定

情報学部の1学科である、情報ネットワーク・コミュニケーション学科では、学生の多くが卒業後ネットワークエンジニアとして就職する。彼らネットワークエンジニアに広く求められる資格の一つにシスコ技術者認定がある。これは、シスコシステムズ社のネットワーク機器製品を用いたネットワークの設計、導入、運用、サポートに関する能力を認定するものである。実際の機器操作能力だけでなく、ネットワークの知識も広く問われるため、ネットワーク業界において高い評価を得ている。その分、資格を取得するには多くの時間を費やして学習及びトレーニングをする必要がある。

そこで本学科では、正課外の特別プログラムとしてシスコ資格取得講座を夏季休暇期間と春期休暇期間の年2回実施している（図3）。講座に使用する機器の制約上、受講者数は10名程度に限られるが、毎回多数の希望者から受講者の選抜を行うほど人気の講座である。本学はシスコネットワークアカデミーの認定も受けており、講師はインストラクターの資格を持つ技術職員が担当している。2015年度から開講したが、これまでにエントリーレベルのCCENTだけでなく、10名弱と少数ではあるものの、より高度なレベルのCCNA・CCNP

図2 ITエクステンションセンターのプログラム

表2 資格取得プログラム（2017年度）

基本情報技術者試験
情報セキュリティマネジメント試験
ITパスポート試験
簿記検定3級
ビジネス文書検定3級
TOEIC
秘書検定2級
Microsoft Office Specialist Access
Microsoft Office Specialist Word
Microsoft Office Specialist Excel
色彩検定3級

図3 CISCO講座（2017年度夏季）

の合格者も輩出している。特にこれらの合格者の 100% が非常に早い時期（学科就職率 20% 程度）に就職内定を得ており、本資格取得が就職に対して有利に働くことを裏付けている。

(2) CG-ARTS 検定

同じく情報学部 of 1 学科である情報メディア学科では、情報コンテンツに関わるエンジニアやクリエイターを輩出するための教育に力を入れており、その一環として、CG-ARTS 検定の受験を積極的に推奨し、合格につながるように複数の正課講義科目で連携を取るなど力を入れている。CG-ARTS 検定は画像を中心とした情報分野のスキルアップ向上を目的とし五つの認定試験がある。また表 1 にも示したように資格取得による単位認定制度も設けている。平成 28 年度には合計で約 330 名の合格者を出し、CG-ARTS 協会の所管である文部科学省から、優秀な成績を修めた団体として 4 年連続となる文部科学大臣賞「団体賞」を受賞した。またトップレベルの合格者数を記録した実績において、優秀校としても表彰された。

7

大学における資格取得支援の課題

これまでに述べてきたように、大学にとって学生の資格取得は教育の目的ではなく、その効果を高めるための手段の一つである。したがって、有効的に活用しなければならない。そのために解決しないといけない課題が幾つかあると考えている。

第 1 に支援の公平性・妥当性である。現在存在する膨大な数の資格に対して、例えば単位認定制度を設ける場合に、どの資格を対象とすればよいか、そして認定単位数を幾つにすればよいか、を決めることは非常に難しい問題である。例えば図 1 における資格 N の取得に成功したとする。この資格の難易度がどれだけ高くても、講義 B、C や演習 B、C に関する全ての学力を有していることの担保にはならない。したがって、この資格取得に単位を認定すると、講義 B、C や演習 B、C の修得が不十分であるにもかかわらず学生が科目履修をしない、あるいは講義 B、C や演習 B、C を履修することで一部の学修内容に対して重複して単位が与えられることになる。このように、安易な認定は大学における教育効果をかえって下げる可能性もある。また、資格の難易度と単位認定の有無や単位数に大きな隔たりがあると、教育の質保証という点での信頼性が損なわれる。

第 2 に学生の履修計画の乱れである。4. で述べたように大学は資格取得を学力の担保として考え単位認定しているが、学生からは資格を取れば単位がもらえると安易に受け取られがちである。実際、資格取得による単位取得を前提とした履修をした結果、資格が取れなかったために進級・卒業ができなかったという事例が発生している。そこで履修指導等を通じて学生の意識を正しい方向に向けることが重要となる。

第 3 に費用対効果の問題である。5. や 6. で紹介した、具体的な資格取得支援講座を大学内に設けるためには、講師や教材の手配など多くの費用が掛かる。一方で講座を受講する学生がいなければ、これらの費用は無駄になってしまう。この問題を解決するには、資格に対する社会や学生のニーズを的確に把握し支援できる仕組み作りが必要である。そのためには支援制度の有効性に関する定量的かつ客観的な評価が必要であるが、残念ながら本学ではこの部分が不足しており、大きな課題であると考えている。

8

おわりに

大学が考える学生の資格取得について述べたが、本学の事例に基づいた筆者らの考えであり、それぞれの大学が置かれた環境により異なる考え方があるかもしれない。しかしながら確実に言えることは、資格取得の主体は学生だということである。大学としては、これからも学生の意欲を十分に尊重し、積極的に支援していきたい。

塩川茂樹 (正員：シニア会員)

平 10 慶大大学院博士後期課程了。同年名工大・電気情報工・助手。平 13 神奈川工科大・情報ネットワーク工・助手。助教を経て教授。現在に至る。無線マルチホップネットワークの研究に従事。博士（工学）。平 8 本会交換システム研究会優秀論文賞、平 12 電気通信普及財団テレコムシステム技術学生賞、平 20・平 26・平 28 本会通信ソサイエティ活動功労賞各受賞。

長谷部正孝

昭 55 玉川大・文・外国語・英語専攻卒。同年自動車整備機器商社に入社。平 7 学校法人幾徳学園神奈川工科大。企画広報課課長、総務部総務課部長、入試課 担当部長を経て現在、監査室室長兼キャリア就職課担当部長。平 26 (株) 神奈川工科大企画 IT エクステンションセンター非常勤取締役。